

# アンケートの回答

芳賀孝行

## 質問

- ①「白鳥」はどのような存在ですか。
- ②「白鳥の保護」はどうあるべきですか。
- ③「日本白鳥の会」にのぞむ事は。
- ④ 出版物の発行について。
- ⑤ その他。

①家族の様なものです。  
②自然をこわさない事です。  
③今までどおり頑張ってください。  
【北海道士別市・宮腰武夫さん】

①定時定点調査を含め、毎日曜日の調査を通じ、それが一種のライフワークであり生きがいの対象です。  
②白鳥たちが自然に採餌ができて越冬が完了できるよう（特に本州において）湿地帯の保全・確保を計るべきと考えています。  
③北海道は不凍湖、沼、川が少ないので、本州に於ける湿地帯の保全に向け強くはたらきかけを望みます。  
【北海道小清水町・玉田さん】

①白鳥は昭和48年4月20日早朝、北帰行の素晴らしい光景を見て以来、友人でもあり、兄弟でもあります。  
②「白鳥の保護」は白鳥を取り巻く環境が悪化している以上、強力で推し進めるべきです。  
③会員の中の親睦を計ると同時に、自然環境を守る事を推し進めてください。  
【北海道網走市・西田博さん】

①コハクチョウの優雅な姿が多くなり、平和のシンボル。環境の問題がある。  
②地域の総合保護センターの設置が必要。給餌問題。  
③総会と研修会を合併してはどうか。  
【北海道当別町・星子廉彰さん】

- ①日本白鳥の会を通じて、多くの先輩、友人を得た事。また、多くの白鳥の飛来地を訪れて色々な経験をさせていただきました。ある意味では白鳥は幸運の女神です。
- ②元気な白鳥はある程度放っておいても良いのですが、傷病鳥を保護・治療する施設を作ること。日本白鳥の会単独で作るのは困難なのですから、関係官庁の費用を利用して作って欲しい。できれば白鳥飛来都道府県に1ヶ所は必要だと思います。
- ③イベントやマスコミを利用して、日本白鳥の会の存在を知ってもらい、魅力の持てる会作りをして、若い会員を勧誘すべきだと思います。

『北海道札幌市・芳賀孝行さん』

- ①神秘的な鳥です。真白く両翼を広げると2.5m、全長1.6mの大きな鳥が人間の手から餌を貰っている姿を見ているとなにか引きよせられるものがある。大人は感動、子供は歓喜する。また、旅立ちが近づく3月頃になると、川と水田を往復するようになる。午前中は水田に舞い降りて落ち穂を拾って食べている白鳥に近寄ると大きな声で警戒音を発して飛び立ってしまう白鳥が、午後には川に帰ってきて人に餌をねだる。同じ白鳥がである。人間の力を借り野生に戻ることを知っている賢くて実に素晴らしい鳥です。
- ③水鳥を救うために一刻も早く鉛弾を鉄弾に替えてください。

『青森県青森市・蝦名猛義さん』

- ①初めて見た時こんな大きな鳥が身近なところに飛来しているのが信じられなかった。
- ②白鳥の生態研究を踏まえた上で、なるべく自然のままにしておきたいものです。しかし、人為を加えないことは不可能と思われるので必要最小限の関与は必要だと思います。
- ③特にありません。

『青森県下田町・松林由範さん』

- ①冬鳥として毎年たのしみにしている、身近で接することのできる唯一の大型の鳥です。ハクチョウの定時定点調査のカウントはたいへんな作業であるが、ハクチョウと同時に他の水鳥類も観察することができる。とかく寒い時期には外出したくないが、ハクチョウがさそい出してくれるようなところもある。
- ②なるべく人工的な事を加えないで越冬させること、最近ハクチョウが飛来するとすぐ餌付けをしてしまう傾向がある。ハクチョウに親しむという事では、良いことかもしれないが餌を人間に頼ってしまう事になる恐れがある。又、与えている餌も最近のスナック菓子などが多く、ハクチョウの健康に影響を与える事が十分に考えられるので注意したいものである。(一部略)ハクチョウ飛来地はすべて禁猟区にすべきであろう。
- ③会員を増やす事、特に若い層の入会が急がれる。10年、20年先を考えると老人の団体になる恐れがある。若い層にとってハクチョウ及びハクチョウの研究や、白鳥の会が魅力あるものなのか考えるべきである。野鳥人口が増えているにもかかわらず、白鳥の会員が増えないのは、その辺にもあるのではないだろうか。したがって今後はあくまで白鳥だけにこだわる会とするの

か、ハクチョウ類、ガンカモ類を中心とする水禽類全般を対象とした会にしてゆくなど今後の姿勢をはっきりすることも必要なのではないかと思う。

『青森県陸奥市・阿部誠一さん』

- ①定年後の夫婦共通の楽しみとして、特定の白鳥たちとの交流を深めており、孫の様に付き合っています。野性動物と人間との信頼関係はどれ程保たれるものか。白鳥との意志の伝達（ある意味での会話）はどれ程迄出来るものか、などに挑戦しながらアメリカコハクチョウとその仲間たちについて調査・研究している。
- ②白鳥が飛来・越冬している周辺自然环境の変更・破壊は避けて欲しい、とは言っても、北上市の新堤、北上川の両白鳥飛来地のここ8～9年の環境改悪は激しく、すべて人間には目先有利、白鳥には不利なものばかりで、これら改造前後の状況はあらかじめビデオに記録、保存してあります。特に新堤は荒んできており、行政側と愛鳥家との綱引き状態が続いています。
- ③ボランティアの活動が中心なので、どうしても個人的興味が先行するのは止むを得ませんが、もう少し国内のデータをしっかりしたものにする工夫が肝要と考えます。そのためには質の良い越冬期間のネットワーク作りが必要でしょう。北上は昨年30羽を越える黒嘴白鳥を観察出来る特異的ですが、これに似た場所がもっとありそうな気がします。

『岩手県北上市・村瀬正夫さん』

- ①北方という未知なる聖地からの使者、舞い降りる町の平和の象徴。
- ②給餌のしすぎは自然の法則に反するという警戒論もあるが、年々飛来数が多くなって、内地での死亡件数も増えていないなら、餌付けは十分にすべきである。ケガして保護、治療し、再放鳥するまでの体験談をわかりやすく衆知させることも必要ではないか。救おうとして橋脚に激突死した事例もあるので。小生は、2羽だけですが再放鳥の体験を持っています。
- ③特にありません。

『岩手県一関市・横沢重雄さん』

- ①町のシンボル。
- ②観光としてではなく、あくまで保護を基本。餌付けは不自然ではあるが、飢えに遭遇するよりは遥かに保護に通ずる。
- ③全国的な情報交換など、積極的なそして有意義な活動に感謝します。関係団体、国などと連係を取り白鳥飛来そして保護の意義に訴えたい。また更に国際交流を進めたい。
- ⑤白鳥は世界的な平和のシンボルになると考えています。また、子供の将来の自然保護の意識を高める上にも大いに有用と考えています。先般北欧の福祉視察で数々の白鳥の図柄（織物、壁飾り、置物）にふれ、感銘した。

『秋田県十文字町・西成辰雄さん』

- ①極寒のシベリアから長い旅路を経て、白石川で羽を休める白鳥は、私たちにとって「かけがえ

のない」存在です。白鳥たちが安心して越冬し、春には無事北帰行につき、また初冬には、この大河原の地に戻って来られる様に、白鳥の保護、河川環境の保護に努めたいと思います。

- ②「白鳥の保護」は必要最低限にとどめ、過保護にならないようにと考えております。「可愛いから」などの理由でパンなどの餌を与えている方もいる様ですが、白鳥は「見せ物」でも「ペット」でもないので過度の給餌はご遠慮いただく様お願いしています。あくまでも補食程度にとどめています。
- ③支部を設けて定例の観察会や研究会を行ってはいかがでしょうか。また、白鳥ニュースはページを増やすか、発行回数を増やしてはいかがでしょうか。会員同志の交流や親睦の機会をより多くしていただきたい、と思います。

『宮城県大河原町・大河原白鳥を守る会 会長高橋守さん』

- ①自然の象徴。
- ②白鳥の住める自然環境を保存育成する。乞食白鳥でない白鳥が見られる様に。
- ③広報活動を今よりもっと多くし、より多くの方々の理解を得る。
- ⑤白鳥が多々良沼で越冬する様になり15年が経ちました。今では100羽前後が飛来する様になりました。多々良沼は全面禁猟区になりましたが、水質、植生の悪化等問題をかかえ白鳥の前途も多難です。

『群馬県館林市・川島正一さん』

- ①子供の頃より見慣れた鳥。
- ②特別「白鳥」だから「保護」が必要なのだろうか。ガン・カモ鳥類の仲間として「保護」を考えて行くことが必要なのではないのか。
- ③松井会長及び事務局は良くやっています。しかし、白鳥の渡来地が多く、白鳥が身近になり過ぎ、白鳥の保護を必要と感ぜない人が多いため、日本白鳥の会に関心が集まらないのではないだろうかと思います。日本白鳥の会の運動の方針転換を考えれば、1. 学術的なもの、2. 友の会的なもの…の大きく2つに分かれていく事も必要なのではないでしょうか。

『宮城県迫町・境 博さん』

- ①仲間。
- ②保護するというより白鳥の住める環境を維持する。
- ④写真集「水鳥の楽園・伊豆沼」1989年12月1日発行

『宮城県古川市・日向 努さん』

- ②基本的には、白鳥に対する餌付けという事はすべきではないと思うし人間として、自然界の中で共存していける環境を作っていけるような保護をしていかなければならないと考える。餌付けを観光の目玉にしたりする様なことは好ましくないと考える。もっとも忌み嫌うべきは、保護をしている（餌付けをしている）人間の『これは私の白鳥なんだ』という様な意識ではない

かと思う。(一部略)

- ③根本的にセクト主義、エゴイズム、排他的に陥らないようにして欲しい。基本的には『餌付けをしなくてもいい様な環境を作っていく事が活動の主眼である。』事を活動の基本として明確に打ち出すべきではないか。白鳥の全国的な情報をもっと早く的確に流し、交換しあえる組織を作って欲しい。パソコンネットワーク、FAX通信網を整備し即座に情報を送れる様なものが欲しい。(一部略)
- ④『白鳥ハックン物語』1993年10月21日発行  
『山形県酒田市・角田分さん』

- ①改めてと聞かれるとこんな言葉が浮んできました。あなたにとって「家族」とは？  
つまり、言葉で表現することの難しい存在です。白鳥たちの行動を見ていると、家族や人間社会の理想的な関わり合いを教えられる事がしばしばです。
- ②自然のままの越冬地を残す、さらに増やす。=自然餌の確保。給餌量の適正化=環境に対応し、国内の移動を妨げず、自然適応力を低下させない。趣味的狩猟の全廃。=人間に対する信頼感の回復。
- ③白鳥保護に携わる方々から社会への、強力なディストリビューターになる必要があると思います。白鳥を取り巻く環境には様々な問題があり、白鳥保護のための宣伝・啓蒙運動を強力に推し進めて頂きたいと思います。会員も各地方においての観察・研究等を保護思想の一助となる様積極的な活動が必要だと思えます。  
『茨城県高萩市・姪田裕之さん』

- ①白鳥は青春時代の旅の思い出と重なり、松井会長、三上顧問を始めとする多くの良き先輩・知己と巡り逢うきっかけを作ってくれた、白い天使のようなものです。
- ②昔は狩猟者から白鳥をいかに守るかという事が白鳥の保護の主題でありましたが、今は、白鳥の渡来地の環境をいかに保全していくかという事が一番大きな問題になっていると認識しています。行政を巻き込んで問題解決に行かざるを得ないと思います。
- ③創立20周年を機会に、会としてのスローガンを打ち出してはいかがでしょうか。  
『埼玉県大宮市・松本勝彦さん』

- ②鉛害はさし迫った現実問題となってきました。鉛弾の速急の禁止を行政に強く働きかけてください。  
『新潟県荒川市・加藤誠一さん』

- ①「日本の白鳥過去最高と地球温暖化によるハバロフスク寒気団」をテーマにした生涯探求。
- ②本年9月13日、環境庁報告書によると、21世紀末には平均気温が3°上昇、海面は65cm上昇するという。今後はますます、水鳥、特に白鳥越冬の湿地保全に努力していかなければならない。
- ③会誌に各種研究レポートのあらましを掲載して、自然保護の重要性をアピールしなければなら

ない。(以下略)

- ⑤「日本の白鳥渡来数は、約10年前から急増している。地球温暖化とも関係している」は地球圏－生物圏国際協同研究（IGBP）刊行の議事録として、平成5年に各国へも配布された。(一部・略)

【新潟県新潟市・中西 朗さん】

- ①白鳥は私たちにとって「村おこし」の神様です。ヘドロに覆われた湿地地帯に白鳥が定着する様になってから、多くの人たちが足を運んでくれる様になりました。無関心層の人たちの耳・目も白鳥に向く様になりました。環境も整備されました。
- ②私たちは「野鳥の保護」と言うだけそれた考えは持っていません。「人間と自然の共存」と言うスタンスを取っています。白鳥に関しては、不足分の餌を補給するという考えです。パンはカロリーの面を考えると極力避けざるを得ません。くず米・くず麦・シダ(ニイナ)などが主体です。
- ③私たちの様に、鳥類に関する素人集団に対して、色々ご指導いただき感謝しております。今後とも気長にご支援いただきたいと思います。なお、出版される文献などは、もれなく送付して下さい様お願い致します。
- ④「白鳥の里1年の歩み」平成元年以来年1回発行 「里親だより」平成2年以来年1回発行  
【石川県羽咋市・金丸出白鳥の里推進委員会 代表藤井敬一さん】

- ①冬の使者、恋人。  
②良い環境づくり。  
③白鳥に関する情報。  
④「白い恋人たち」1990年11月10日発行  
【石川県羽咋市・川口雅登さん】

- ①一般の野鳥と変わりはないが、白く大きいので、人々に親しまれやすく愛鳥教育の手段の1つとして、利用している。
- ②各地で保護を盾に、白鳥だけに給餌が行われているのは、おかしいのでは？白鳥の生息環境の保護、保全にもっと目を向ける必要があるのでは？
- ③シーズン中の飛来動向を連絡出来る、各地との横のつながりがほしい。  
【石川県羽咋市・沢田 隆さん】

- ①本格的に付き合う様になったのはウトナイ湖サンクチュアリのレンジャーになってからで、12年を迎えようとしている。生まれと育ちが岐阜県で、ここではほとんどハクチョウ類が観察されません。いつだったか1羽のオオハクチョウが、溜め池に飛来した事があり、その後そこは鳥獣保護区になったほどです。これほどめづらしかったので、昔の私にとってはまさに憧れの鳥でした。友だちと初めて宮城県の伊豆沼に行ったとき多くのハクチョウ類を観察し、泊まっ

た宿の上空を「コオ、コオ」鳴き声と羽音まで聞こえたのには感動しました。(一部・略)

- ②基本的には生息地の保護及び復元が最優先されるべきと考えます。あまりにも開発が進み過ぎ、難しい事と思いますが、給餌に頼らなくても冬を越せる環境の保全を行えばと思います。その上で人との触れ合いや環境教育の一環として給餌を行うところがあっても良いと思います。現状において給餌の必要性を認識していますが、今までいなかったところに観光用に寄せたりするのはいかがなものかと思います。
- ③「ガンを保護する会」「オオタカ保護ネットワーク」など野鳥保護の活動は、今後ますます種ごとの専門的な活動が中心になってくるのではないかと思います。そうした意味で白鳥についての専門の会が20周年を迎えるのは先駆的な活動だったと思います。20年の歴史を踏まえ、今後ますますハクチョウ類についての保護、研究の中心的な団体として活動される事を望みます。  
【石川県加賀市・大畑孝二さん】

- ①自然にとけこめる、自然へのメッセージを人間に伝えてくれる。その地方のシンボリック的役目をしている。冬の風物詩である。
- ②給餌の後継者は自然であって欲しい。しかし、今の現状ではそうもいかない。給餌＝保護であると思いきず、給餌しながら自然を取り戻す努力もしたい。
- ③全国的に集まる機会とは別に地区ごとで活動できればと思う。マンネリ化してきている傾向。
- ④白鳥飛来10周年記念「白鳥が結ぶ人の輪心の和」平成6年9月10日発行  
(アルプス白鳥の会・長野県豊科町)  
【長野県アルプス白鳥の会会員・上島 順さん】

- ①琵琶湖西岸では10月下旬頃にコハクチョウが渡来して来ます。その姿を見ると「今年も遠方より来てくれて本当にご苦労」と声をかけてやりたくなります。3月中～下旬までの5ヶ月間は白鳥の渡来数、遊泳状況などを観察するのが楽しみです。
- ②琵琶湖へ渡来してくる白鳥たちは、湖底にはえているネジレモ、カナダモなどを食べています。食べやすい湖底から食べている間水草が少なくなり、次第に南の湖岸へ移動したり、昼間は湿田へ餌をとり、夜は湖岸へ帰る様な行動をする事があります。特に、今年は琵琶湖も記録的な渇水のため、9月1日で平均より103cmも水位が下がっています。冬期になっても水位が十分に元に戻らないと、例年のように水草が食べられるか心配です。琵琶湖でも白鳥へ給餌をする必要が出るのではないか心配です。  
【滋賀県新旭町・堀野善博さん】

- ①琵琶湖の全域が、鳥獣保護区になって20年余が経過しましたが、設定時は主にカモ類の保護が頭にあり、欲を言えば落雁の史実から、ヒシクイも仲間とした。渡り鳥が群れ遊ぶ冬の琵琶湖を想定しており、そこへコハクチョウが毎年越して来てくれるとは予想もしなかった事で、当時、鳥獣保護行政を担当していた者として、その喜びと驚きは今、なお忘れられるものではありません。200羽が500羽となり、そして1000羽となっていく事を夢見ています。

- ②最近、湖岸に近い田圃での、個人的給餌によって集まってくる姿を見受けますが、従来、北帰の時期が近づくにつれて田圃で採食していた状況に変化が見られます。今後、給餌について、その適否はもちろん、方法、場所、時期など十分検討すべきものと思います。
- ③従来どおり、学術的調査研究と地域における一般情報的調査などの2本立てで運営される様、望むものです。(一部略)
- 『滋賀県新旭町・八田知昭さん』

※お断り

アンケートは紙面の都合上一部省略させていただいた方もあります。あしからずご了承ください。